全教 枚方教育

全教・枚方教職員組合
枚方市西禁野 1-1-3
No.１８９０
2022.6.14.
TEL 848-3300
Fax 848-3052
組合ホームページ

世界の対立と分断、軍備増強と憲法改悪が強調される中で
紛争の解決、本当の平和のために必要なもの

大量の戦争報道、中ロ脅威報道の中で、マヒする感覚と冷静な思考

ロシアのウクライナへの軍事侵攻で連日戦場の悲惨さが伝えられ、ロシアの行動への批判がマスコミで報道されています。一方で、中国の脅威が強調され、米中の対立が強まる中で、日本でも自民党、維新の会をはじめ、日本への攻撃がない段階でも「適地攻撃」「先制攻撃」を可能にし、「核兵器による報復」を取り上げ、具体化していこうとしたり、平和憲法の改悪ねらっています。アメリカの始めた戦争に合わせて「先制攻撃」「適地攻撃」も可能とする政府の立場も国会で明らかになっています。

大量の戦争報道、中ロの脅威がマスコミで連日流されている中で、感覚がマヒし、冷静さが失われ、将来の日本の在り方、世界の在り方を合理的に考えることが困難になっていると言えます。

ガンダムが問い直す戦争「力こそが戦いを呼び込むのではないか」
NHK・ニュースウォッチ9インタビューより

機動戦士ガンダムの最初のシリーズが映画『機動戦士ガンダム ククルス・ドアンの島』として再構成され６月から公開が開始されています。この映画では、ロシアのウクライナ侵攻前に完成したものの、テーマが戦争の重みを取り上げるものとなっており、激しい戦争が繰り返される中で、思考がマヒしがちな私たちに、重要なものになっています。

映画の中で、戦争孤児たちの、戦争に巻き込まれていく普通の人たちの姿、戦争の残酷さがリアルに描かれています。さらに多くの孤児たちと暮らす脱走兵が、武器の力で子どもたちを守ろうとするやり方に主人公のアムロから疑問が投げかけられます。このシーンにこだわった安彦監督の思いが込められています。

アムロ 「武器を捨てるべき」「力こそが戦いを呼び込むのではいか？」

「愛するものを力で守るという大変勇ましく、美しいテーマでポジティブに描かれることが多いがですけれども、これって非常に危ういテーマなんですよね。“相手が増強したら、こっちも増強しなきゃ”そういうイタチごっこになる。これは結局、解決のないエスカレートだと思うんですよね。

これに対して“いや、これちょっと待てよ”ということがなかなか言えなくなっちゃう。
これが（力で守ることが）全面的にポジティブに考えられていていいのかというのが、これが引っ掛かった部分で、やはりどうしても考えざるを得ない問題なんじゃないかと思うんです」（安彦和夫監督）

二度の大戦の教訓 「平和的手段で紛争を解決」（国連憲章）

世界が二度の世界大戦の大きな犠牲の上に引き出した教訓は、何より世界が 2 つのブロックに分断されて対立をエスカレートさせてはならない、武力によらない問題解決、紛争の解決こそが必要という点です。

ロシアのウクライナ軍事侵攻や力を背景にする現状変更の動きは、国連憲章、国際法によって厳しく批判されるべきで、国際社会の批判によってロシアを追い詰めテイクことが何より重要です。

軍事と力の外交によって対立をエスカレートさせても、たがいが破滅しかねない危機に直面していることは明らかです。

平和的手段によって、紛争を解決（国際連合憲章　第１条）

〇侵略行為その他の平和の破壊の鎮圧とのため有効な集団的措置をとること
〇国際的の紛争・・・は解決を平和的手段によって・・国際法の原則に従って実現すること。

分断と対立のエスカレートでは問題は解決しない（シンガポール首相）

ロシアの軍事行動を厳しく批判する一方で、「これを民主主義対専制主義という図式にはめ込むのは、終わりのない善悪の議論に足を突っ込むことで、賢明ではない。」「ウクライナ問題で危機にさらされているのは国連憲章と法の支配」と強調、かつてない核兵器の存在で世界大戦の「未知の領域」の危機に警鐘を鳴らしています。　　5/27 日経新聞インタビューより

平和憲法なのに「敵地攻撃」「先制攻撃」「核の共有、核兵器による報復」！！

安倍元首相　アメリカの核兵器を日本に配備し、核の報復を明確にすることが重要、
敵地攻撃能力は、基地に限らず中枢も攻撃出来るものに

岸田首相　「いわゆる『反撃能力』（敵基地攻撃能力）を含めてあらゆる選択肢を排除しない」
米国の核戦力による「拡大抑止」、日本への「核の傘」の提供について重要性を確認した
「日本の防衛力を抜本的に強化し、その裏付けとなる防衛費の相当な増額を確保する」

維新の会　「憲法 9 条の改正に向けて」を公表。9 条改憲をめざす
「中距離弾道ミサイル」の保有提言
「核共有を含む『拡大抑止』の議論開始、防衛費の倍増を提言

平和憲法の日本で、あり得ないような議論連日行われ、準備が着々と進んでいます。

日本に攻撃なくても、アメリカの戦争でも、「適地攻撃」もありうる!!
かつてのイラク戦争、アフガニスタン戦争でも参戦可能に！？

この間の国会での政府答弁の中でも、「適地攻撃」が日本に攻撃がなくても攻撃される準備が行われていると判断した段階で可能である。さらには、日本への攻撃がなくても同盟国のアメリカへの攻撃の可能性があることをもとに「適地攻撃」が可能と述べるなど、戦後日本が平和憲法のもとで基本政策としてきた「専守防衛」さえ 180℃方向転換させるものです。

これでは、イラク戦争、アフガニスタン戦争などへの参戦も可能になります。日本と近隣諸国との対立を日本からの武力衝突、果てしない戦争に踏み込んでしまいます。アメリカへの攻撃の可能性はアメリカだけが判断できるもので、アメリカの始める戦争に、自動的に日本が積極的に参戦するものです。

今こそ重要に、「再び教え子を戦場に送らない」誓い

国際社会が導きだした教訓である国連憲章、日本が多くの犠牲の上に作り上げた憲法こそ守る発展させる必要があります。われわれ先輩たちが掲げた「再び教え子を戦場に送らない」誓いが今こそ重要になっています。

全教（全日本教職員組合）の枚方教職員組合のニュースです　枚方教組に加入して学校や働き方を変えていきましょう

市教委・来年度からの支援教育方針

時間をかけた説明と理解、市独自の少人数学級拡充
「特別支援教育支援員」など十分な条件整備こそ必要

市教委が突然示した、来年度からの支援教育の方針に、中身が分かれば分かるほど、学校や保護者からの疑問や批判が続き、広がっています。

市教委は、教職員向けの説明会を開催、疑問や意見も事前に提出出来るような対応もおこない、6 月 7 日の校長会では、当初必ずしも通級教室が全校設置できるかは確かでないとしていましたが、市教委として必要な学校には全校設置すると公表しています。

しかし、いっぽうで保護者向けの説明動画を作成して、来年度以降の「学びの場の変更」について懇談することを求めています。その内容は、市教委の当初の方針を変更せず、子ども保護者や学校に教育条件の激変を 1 学期末懇談で迫るものとなっています。

保護者、なぜ短期間で激変を迫る？十分な支援が受けられない！
支援学級の時間だけでない、子どもたちが必要とするたくさんの支援

保護者の間に急速に広まる疑問や不満は、

「6 月近くに示された来年からの激変する選択を、たった 1 ヶ月あまりで迫られるのか。」

「このままでは今までのような必要な支援が受けられなくなるのではないか」

これらの疑問や不満へ、説明や理解を得る取り組みが十分でない中で、来年度からの実施だけは決定して選択を迫る、必要な支援への条件整備も内容がよく分からないまま実施されようとすることへの保護者の不安はぬぐい切れているとはいえません。

市教委は、通級指導教室の週 1～8時間の指導で、必要な支援が行えるとの立場です。

しかし、「通常の学級」で過ごせても、激しいパニックや、周囲とのトラブル、集団行動への適応困難を抱える子どもたちへは、支援学級の指導の時間以外に、たくさんの支援が行われています。実技、集団的な取り組みなどへの付き添い、行事参加などへの支援、身辺整理や連絡・指示の確認など様々な支援の上に、学校生活を続けることが出来る生徒も少なくありません。

数字に表れないこれらの支援がどこまで受けられるかが、保護者も現場もまさに懸念する点です。

内容、制度も不確定要素の多い通級指導教室
このままでは、「通常の学級」にも大きな負担と混乱に

通級指導教室は、枚方ではまだ中学校 2 校、小学校 12 校だけの設置にとどまっています。「発達障害」などの急増に文科省も、2017 年から 10 年かけて通級指導の教員を「子ども 13 人に教員 1 人」定数化すると動き出している途上です。

市教委は必要な学校に全校設置するとしているものの、従来の支援学級にくらべて学校で支援に当たれる条件は厳しくなることは明らかです。

この点からも、時間をかけた保護者も含めた十分の説明と理解が必要です。また、支援の条件が厳しくなることで、支援学級も、必要な支援が受けられない子どもを抱える「通常の学級」の負担や混乱が起きることが懸念されます。

枚方は独自の少人数学級廃止？ダブルカウントはどうなるのか

枚方市は、従来市の財源で独自に小 3･4に少人数学級の教員を配置していましたが、国の 35 人学級拡大にともない、今年度は小 4 だけに縮小しています。市教委は高学年への少人数学級拡大は否定的な姿勢で、このまま行けば独自の少人数学級は廃止になりかねません。

これにあわせて懸念されるのは、独自の少人数学級にあわせて支援学級在籍生徒の「ダブルカウント」の扱いが懸念されます。

市独自の少人数学級が廃止され、国の基準通りになれば、支援学級在籍生徒は「通常の学級」人数にカウントされないため、学級数、教員数の減少、教室の教育条件が厳しくなることも懸念されます。

全国の自治体や府下の各市でも独自の少人数学級が増加しています、枚方も独自の拡充策を早急に策定、実施すべきです。

独自の少人数学級拡充、　「特別支援教育支援員」の配置を行うべき

文科省は、適切な支援のためには、教師だけのマンパワーでは困難であるとして、生活、学習などの支援のために「特別支援教育支援員」の配置を自治体に提唱していました。

しかし、配置は自治体の判断に任され、財源も不十分な中で、枚方市では配置されてきませんでしたが、府下や全国では、自治体の判断で配置している所も自治体もあります。

枚方市が支援を必要とする子どもたちに、十分な支援を提供していくために、市独自の少人数学級の拡充と「特別支援教育支援員」の配置を行うことは不可欠です。

第 2 回まなび庵 「信頼」と「対話」から始まる教育活動
「『学力向上策』より楽しい学校を」、行事・自主活動で成長する子どもたち

6 月 11 日(土)に、第 2 回まなび庵「『信頼』と『対話』から始まる教育活動」が行われました。

多忙な中でも、小学校、中学校の先生たちが集まり、講師の山地さんの話を、熱心に聞き入り。交流の中でも、共感や子どもたちの成長する姿への関心が寄せられていました。

摂津の中学校につとめる講師の山地さんは、いわゆる「教育困難校」でも、校長を始め「『学力向上策』より、楽しい学校を」という学校の雰囲気の元で、子どもたちの声を大切にしながら、制約の多いコロナ禍でも、子どもたちの成長に重要な行事や自注活動のとりくみの実践を報告していただきました。

■「コロナ禍で、行事が縮小され、学校が小さくなっていく中で、学校の意味を考えさせられる」

■「私たちは、タダ波にのまれるのではなく、学校で出来ることを自分たちで考えていく」

■「今まさに世の中の多くの先生たちが模索しながら教育活動を行っている。そんな今だからこそ、子どもたちにとって大切な取り組みをなくさずに、どうしたらその成長を保障できるのか、一緒に考えていきたい」

多忙に追われ、課題の対応に頭がいっぱいになり、子どもたちの思いにまでいたる余裕のない毎日の中で、山地先生が語る言葉は、考えさせられる内容がたくさんありました。

参加者の感想

とても楽しかったです、行事をみんなで作り上げていくことの楽しさを思い出させてもらいました。山地先生の行事に対する思いや取り組み方が聞けて、これからの学校づくりのヒントをたくさんもらえました。頑張れる集団と、それを受け止める集団の療法が大事という言葉が印象的でした。